日本人の宗教心とバハイの思想

Religious Mind of Japanese People and Baha'i Thought

林 彬子 Akiko Hayashi

要旨

世界文明の中では、宗教はどのような状況になっていくのだろうか。今、世界を揺るがしている宗教紛争、異なる宗教間、宗派の違いによる争い。そこから当事者ばかりでなく、見守っている周りの人々も、教訓を学ばなければならないだろう。だが大多数の日本人は、そうした宗教の信者でなくてよかったと考えたり、紛争を困ったこととは思ってもどうしたら解決に至るか考えようとはしないし、関わりたくもない。日本では自分は無宗教であるという人が7割以上を占める。同じ儒教の国でも、韓国でのキリスト教は著しくのびている。国民の約3割がキリスト教である。日本ではキリスト教系の信者は1%と極わずかしかいない。しかし、ミッション系の学校はかなりあり、キリスト教を学んだ人々も多い。同じ儒教の国で、どうして違いが生じたのか。この現象の日本での経緯と現状を調べ、バハイを受け入れる可能性を探る。

What will be the religious situation in future world civilization? Now there are severe religious war between different religions and sects shaking the world. From these troubles we have to learn instruction not only the people involved but also people watching the situation. But many Japanese think it is good we are not the believers of such religion or don't think how to solve the matter、 or don't want to concern. 70% Japanese say they don't have any religion. Though Korea and Japan are same Confucianism country、 Christianity in Korea is growing remarkably. 30% Koreans are Christians. In Japan only 1% of population is Christians but there are many Christian mission schools in Japan and many students have learned about Christianity. Why the difference between Japan and Korea has arisen? In this paper I will search reason this situation has been created in Japan and seek the possibility of accepting the Baha'i.

日本の現状

安原(2005)**は読売新聞が** 2005 **年に発表した「宗教」に関する世論調査の結果を分析し、日本人の宗教観について以下のように考察している。世論調査の結果によると、何か宗教を信じているかと問われて、信じていないと答えた人が** 75%**で、信じている** 23%**を大きく上回った一方、神や仏にすがりたいと思ったことがあると答えた人は** 54%**で、ないと答えた** 44%**を上回ったそうだ。宗教を信じていないと答えた人のなかでも、その** 47%**が神や仏にすがりたいと思**

ったことがあると答えている。また、回答の 75%の人が宗教を信じないと答えているにもかかわらず、その 81%がふだん神社や寺、教会などに行くと答えている。安原(2005) は、ここから日本人独特の宗教観を見ることができるとまとめている。

川瀬(2000)は、韓国と日本の学生の宗教意識の特徴を比較し、次の点について述べている。まず、際だった違いを見せたのは、日本人と韓国人の学生の「宗教への関心」の高低であったそうだ。韓国では、「信仰を持っている」「信仰は持っていないが宗教に関心がある」と答えた学生が合わせて 60%にのぼったのだが、日本では「あまり関心がない」「関心がない」と答えた学生が 58.2%で、韓国の学生の結果とほぼ逆になっている。(図1を参照)『韓国ギャロップ』という団体が 1997 年に行った調査の結果では、何らかの信仰を持っていると答えた人は 46.9%で、川瀬(2000)の調査結果と一致している。

信仰している宗教の分布は図2にまとめられている。これを見ると、韓国はプロテスタントが大変多く、カトリックと合わせると、信仰者の 67.6%にのぼることが分かる。仏教は 28.0%である。一方、日本人が信仰している宗教は新宗教が最も多く、信仰者中の 35.3%を占め、ついで仏教が 33.8%であった。韓国におけるキリスト教の隆盛は日本でも良く知られているが、この数字はその印象の正しさを示している。また、韓国では新宗教信者が少ないこと (信仰者中の 1%強) も、際だった差異の一つであった。

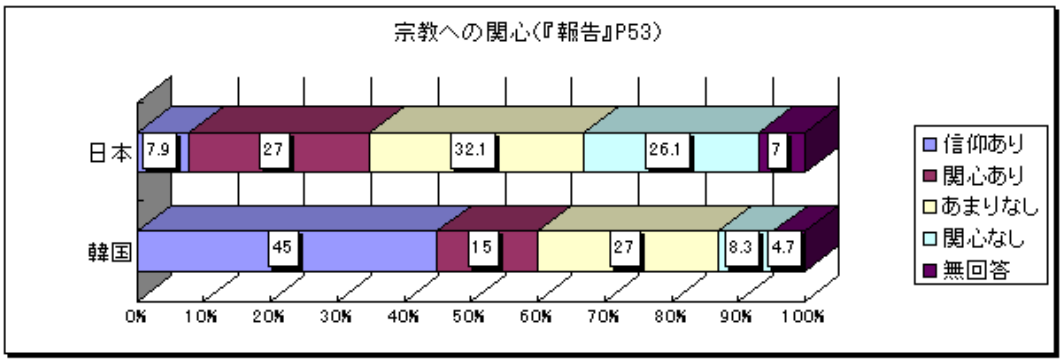

図 1:宗教への関心

(川瀬、2000、http://homepage1.nifty.com/tkawase/osigoto/kaken01.htm)

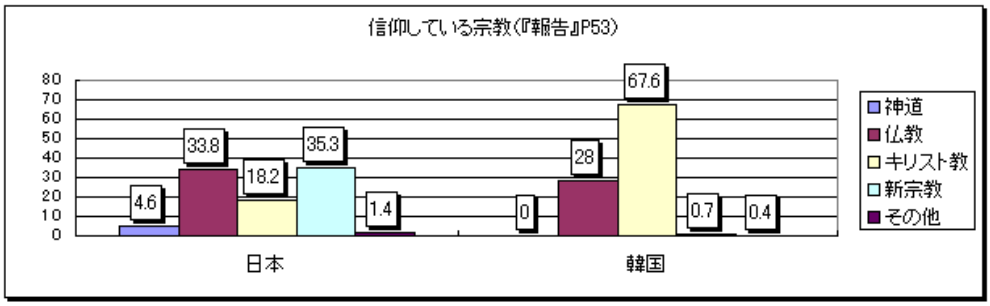

図 2:信仰している宗教

(川瀬、2000、http://homepage1.nifty.com/tkawase/osigoto/kaken01.htm)

また、川瀬 (2000) の調査によると、日本人は霊的なものに関心が高いとの結果もでている。

日本人回答者の 55%が魂と肉体の分離、51%が輪廻転生、49%が天国の存在、32%が死後の裁きを信じていることが分かった。日本人の 3 分の 2 の成人は宗教をもっていないと回答したにもかかわらず、彼らに信仰心がないわけではなく、その多くが特定の宗教、特にキリスト教や新興宗教に属する必要はないと考えている、との結果も報告された。

日本の宗教人口

日本における宗教の信者数は、神道系が約 1 億 700 万人、仏教系が約 8、900 万人、キリスト教系が約 300 万人、その他約 1、000 万人、合計 2 億 900 万人となり、信者数の合計は日本の総人口の 2 倍弱になる。

外国人は日本人の宗教性が理解できない。信じる宗教がないといいながら、宗教的行事をし、道徳的である。お正月には、神社、寺院のみさかいなく初詣に出かけ、葬式は仏教で行い、意味のわからない仏教のお経を聞く。日本人の多くは、仏教徒といえども、日常的には何も宗教的探求もしないが、家では仏壇で先祖の霊に祈ったり、神棚へ願い事をしたりする。彼岸や盆には墓参りをし、神社では、御利益を願い、七五三で子供の成長を祝い、建物を建てたりする時には地鎮祭をする。そうかと思えば、結婚式はキリスト教会で挙げ、クリスマスを祝う。節操なく仏教、神道、キリスト教の行事を生活に取り込んでいる。気に入ったものはあまり深く考えず、徐々に取り込んでいく。仏教が伝来して以来、これまでずっと神道と仏教を同時に受け入れてきたし、伝統に盲目的に従った暮らしをしている。今もあまり宗教的ではない論語を読む人は多い。

神道も仏教も多くの宗派がある。明治以降多くの新宗教ができ、仏教系、神道系の新宗教の会員になる人も多いが、現在では、教勢の停滞ないしは衰退が起きているものがある。新宗教は家族を始めとする身近な人々と親しく交わりながら、現世での幸福を追求する。大本教のようにバハイの考えに近いものもある（万教同根）。悩みの解決による個人の救済を主とする。第2次世界大戦後にできた新新宗教も著しく伸びているものがある。「新新宗教」という言葉は、西山茂氏が戦後の新宗教と 1970 年代以降の新宗教のことを区別するための用語として提唱し、その分野の専門家により広く使われ始めた言葉である。新新宗教は現世での家族等の交わりにそれほどの高い価値を見いだしておらず内向的な関心が優越し、現世を超えた領域での救いに関心が向いている（魂、来世、輪廻転生）。色々な宗教の教義、科学的知識、心理学等を取り込んで、新しい教義、規範を持つようになっている。世界を包含するような宗教を求める傾向は弱く、日本文化の優位性を主張したり、中には、人の弱みにつけ込んで、詐欺まがいの行為でだますものもある。

日本の仏教では心を無にして南無阿弥陀仏とか、南無妙法蓮華経と繰り返し念じるだけで救われるといった、いとも手軽な宗教行為をとり、他の宗教のような厳しい宗教的規範は少ない。それで、他の宗教のような戒律や教義で規制されることを嫌う。特定の宗教を信じている人を白眼視したり、うさんくさそうに見たりする。村社会は崩壊しても、人々は世間から孤立すること、少数派に属することを恐れ、周りを見て同じように行動する（村社会の縛り、世の習い、世間体、日本文化の曖昧さ、日本人の従順さ、背服面従、本音と立前、島国根性）。長い間、宗教の名の下に抑圧、搾取されてきたことによって、宗教に洗脳され、利用されることを恐れる。

宗教に対する不信感がある。日本人は争いあう世界の巨大宗教を見て、不完全さを感じている。カルトを恐れる一方で、占いがはやっている。唯物論、左翼思想の洗礼を受けている。戦後は宗教的教育がないために、真の宗教を見分ける力が育っていない。

葬儀の多様化、家族葬、密葬、葬儀をしないで火葬する直葬ですませる。納骨に対する意識の変化、散骨、樹木葬、合同墓、墓を持たない等々の寺離れが起きている。しかし、墓参り、盆の行事、毎日の仏壇への祈りをする人は多い。戒名をつけず、俗名ですませる人が３割に及ぶ（檀家制度、家制度の崩壊）。仏教の衰退に伴って、寺院側では、遅まきながら、ボランティアといった社会活動や修養会、勉強会などを開いたり、悩みの相談に乗ったり寺の巻き返しが起きている。

日本の気候、風土

日本は大陸の端に位置する島国であり、気候は温暖だが、夏は高温多湿で、冬は乾燥が激しく、四季が非常にはっきりしている。温暖で降水量も豊かなので、農業、林業に適していた。地震、洪水、台風、火山噴火等自然災害が多く、自然の豊かさと共に、人間の力の及ばない自然災害に対してあきらめの気持ちを持っていた。自然と共存する姿勢から、万物に霊があるとするアミニズムが生まれ、情緒的、従順な性格ができた。

人手のかかる農耕の必要性から集団の和を重んじる気風が生まれた。日本の和は、権力にとって都合のよいように相互扶助というよい面がある反面、相互監視、犯罪の連帯責任など、理不尽な面もあり、人々は外面的には服従しても、内心は明かさないなど表面的であった。よいことは徐々に受け入れていく柔軟性がある。

日本は島国で、外国の侵略を殆ど受けず、一神教のような厳格な宗教を必要としなかった。現代の日本人の宗教観に大きな影響を及ぼしたのは、長年にわたる儒教や神仏習合と、江戸時代の檀家制度、明治時代からの国家神道にあるのではないか。第２次世界大戦の敗北という悲惨な体験にもかかわらず、旧来の伝統的宗教の枠を出ない事態が続いており、未だに檀家制度や国家神道の影響を受けている。このことは、日本文化の伝統を重んじる社会が影響していると思われる。また、熾烈を極めたキリシタン弾圧の陰が今なお続いている。国家神道による第２次世界大戦での洗脳と厳しい抑圧に対して恐怖心を抱いている。それで、宗教的教育をしないなど、公に宗教を取り上げることはタブーになっているような気がする。仏教も人々の教育には無関心であったし、日本仏教に戒律はなく、念仏を唱えれば救われるといった易行であった。日本の仏教では、教義上霊魂はないとし、次の世もないこととなっているのに都合のいいことを取り入れ矛盾だらけである。宗教を信じないという人たちは、霊的なものを否定はしないが、納得できる宗教を見いだせないでいる。お地蔵様など色々な民俗信仰は今も続いており、願い事や、悩みの解決を目に見えない霊的な存在に向かって祈っている。それでも結局は、神と仏への同時信仰は、唯一の神に嘆願していることなのではないか。一方で、明治時代以降、仏教系、神道系の新宗教に加入している人もかなりあり、戦後に大きく発展した新新宗教を信仰する人も多いが、それらは日本の宗教を基にしたものであり、世界を統治できる規模に発展するとは思えない。

世界的視野の宗教を取り入れようとせず、キリスト教弾圧以来、一神教の教義になじみを持てない。現在は、個人主義的社会の影響からか、メディアや漫画などから霊的なもの、呪術的なもの、スピリチュアルなものに関心を抱く若者も多いが、世界を包含するような宗教への関心は少ない。日本ではバハイの知名度は非常に低く、日本の燎原の火はくすぶり続けてなかなか燃え上がらない。バハイの周りの人々はなかなかバハイになろうとはしない。あるいは、バハイ

のことを聞いても避けてしまう。バハイは悩みを聞いてくれない、解決にならないという。日本では宗教学者や文化人、メディアがバハイを取り上げることは少ない。その原因は、一神教に対する偏見、村社会の縛り、日本人にとってハードルの高いアルコールなどの禁止、断食、寄付の問題、教義が難しい、土葬がなじまない等があるのではないか。

バハイを受け入れるための下地

無宗教と言っている人々の中には理想的なものがないと思っている人々もいるのではないか。既存の宗教はすでに宗教的冬の時代に入り、その力を失っている。バハイは、世界をまとめる新しい宗教であり、今、春期にあるが日本では殆ど伸びていない。

現在のような豊かな生活はいつまでも続かない。困難に伴って精神的な救いを求めるようになる。グローバリゼーションの広がりと共に、意志決定の際に判断の基準となる世界を包含する価値基準が必要になる。日本の文化は、新しい考えを徐々に取り込んでいくという特徴を持つ。バハイの思想が世界に広まっていくにつれ、日本も取り残されないよう追いかけるようになり、世界を統合する宗教が必要になることを自覚するのではないか。仏教と神道が習合してきたように、バハイの思想との習合が進むのではないか。

日本は和を大切にしてきた。バハイも和合の大切さを説いているので、接点があるのではないか。人のいいなりでなく自分でものを考えようとする、個性的な人々が現われてきた。新たな悲惨な体験をしないうちに、バハイを受け入れられたらと思う。

バハイの教え

バハイの教義や、聖典、万国正義院の声明などどれも日本人にとっては難解である。既成の宗教は個人の救済が主で、世界を統治しきれる叡智が足りない。バハイには世界全体の救済方法が述べられている。バハイはこれまでの宗教の欠点がただされ、分派が生じないなど、完成されている。バハオラの提言は曲がりなりにも実現しつつある。霊魂はないとする日本仏教の矛盾点であるこの世とあの世のつながりが明確にされている。

「神は一つである」という概念はまだ受け入れられていない。神道の八百万の神は、森羅万象に神が宿るという見方をするが、バハイでは、すべてのものに付いている名称の総和したものが最大名たる神であるとする。「すべての創造物の内奥の各実在に、神はその諸々の名の中のある一つの名の光を注ぎ、神の諸々の属性の内にある一つの属性の栄光を受け入れるものとなし給うた」（バハオラ、「落穂集」、27 番）。視点を変えれば、同じことなのではないか。「宗教は始めから一つである」とするバハイの累進的啓示の思想と、神仏習合やキリスト教さえも受け入れていく日本人の宗教心と、どこか共通するところがあるように思える。

バハイの思想が実現しつつあるが、その進展に伴ってバハイを受け入れる人も増える。創始者自身によって書かれたバハイの聖典は他の宗教の聖典より、論理的でぶれない。「その聖典は、これまでのすべての宗教性の聖典中で特に卓越し最高のものであり、これ以前にあった諸々の聖典はすべてこの書に照らし合わされなければならない」（バハオラ、「落穂集」、125 番）。

バハイの神概念は、恩恵によって支配する守護神、恩恵を与えるものとしての神ではないか。バハイの恩恵には特別な意味がある。神は、祈り、信仰、殉教、布教、犠牲、奉仕、試練、善行、

喜捨、断食等に応じて、現世と来世に置ける恩恵を与えてくれる存在であるとする。この恩恵には、魂とあの世の存在が前提となる。

恩寵、恩恵、恵沢、恵み、日本語での意味は、自然の恵みというような無条件に与えられるものであり、仏教にはこうした概念は少ないようで、恩寵とか恵沢という言葉も日常的に使われることもなく、意味の違いはぴんと来ない。日本人が神社仏閣で祈る現世御利益は現実的な恩恵を期待するものであるのに反して、バハイの恩恵の概念は、精神的な変革によって事態が変わり恩恵を受けるものではないか。

> 「今日こそは、神の最もすばらしい恩寵が人々の上に注がれている日であり、彼の最も偉大なる恩恵がすべての創造物の中に注入されている日である。自分たちの間の不和を和解させて完全な統合と平和のうちに、彼の保護と慈愛の下陰に留まるようにすることは、世界中の人々の義務である。」（バハオラ、「落穂集」、4 番）

> 「世界は苦しみの中にあり、その動揺は日ごとに深まりつつある。その顔は強情と不信心に向けられている。その状態は実に哀れなものとなり、現在それを暴露することはふさわしくないほどである。その強情は長く続くであろう。そして定められた時刻が満ちた時、突然、人類の四肢を震わせるものが現れるであろう。その時になって初めて神の旗は翻り、楽園のうぐいすはそのメロディーをさえずるであろう。」（バハオラ、「落穂集」、61 番）

バハイが伸びるためには、教義を易しく解説したものやバハイの教義を含んだ著作を広めていくことや色々な活動に参加してバハイの実像を示していくことが必要ではないか。

参考文献

高橋卓志（2009）『寺よ変われ』岩波新書
河合隼雄，鎌田東二，山折哲雄，橋本武人（2006）『日本の宗教性と宗教」創元社
山折哲雄（2001）『さまよえる日本宗教』中公叢書シリーズ，中央公論新社

引用文献

安原力(2005) 「宗教信じない 75% 神仏すがりたい 54% 読売新聞が世論調査」『ChristianToday』
<http://www.christiantoday.co.jp/main/society-news-315.html>
川瀬貴也(2000) 「韓国大学生の宗教意識の特徴－『日韓学生宗教意識調査報告』を中心に」
井上順孝偏(2007) 『現代日本における宗教教育の実証的研究』、p.120-131
< http://homepage1.nifty.com/tkawase/osigoto/kaken01.htm>
文部科学省宗教統計調査『平成 19 年度全国寺社教会等宗教団体・教師・信者数』
<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfil

e/2009/07/10/1245820_005.pdf>
島薗進(2001) 『ポストモダンの新宗教, 現代日本の精神状況の底流』東京: 東京堂出版
バハオラ(2010) 『落穂集』、日本バハイ全国精神行政会翻訳監修。東京:バハイ出版局。